九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No. 328**

2019（平成31）年2月11日（月）発行

■哲学者で「9条の会」呼びかけ人の**梅原猛さん**が1月12日に93歳で死去。2004年6月「9条の会」は、井上ひさし・大江健三郎・小田実・加藤周一・澤地久枝・梅原猛・奥平康弘・鶴見俊輔・三木睦子の9氏の呼びかけ人で発足し、現在、ご健在なのは大江氏と澤地氏だけです。でも2016年9月に「9条の会」新世話人として田中優子や伊藤真氏ら12人が選ばれ、全国で活動されています。

■俳優**市原悦子さん**も同12日に82歳で死去。戦時中はザリガニなど何でも自分で取って食べ、9歳で終戦を迎え「戦争は絶対いや」と話していました。

本会の成人式の『憲法』冊子配布　10年目に

憲法小冊子配る

はらまち九条の会

南相馬市の新成人を祝おうと、はらまち九条の会（平田慶肇会長）は十三日、会場の市民文化会館で、憲法の小冊子を配布した。会員は「おめでとう」と祝いの言葉を添えて、一人一人に手渡した。

新成人に小冊子を手渡す会員（左）

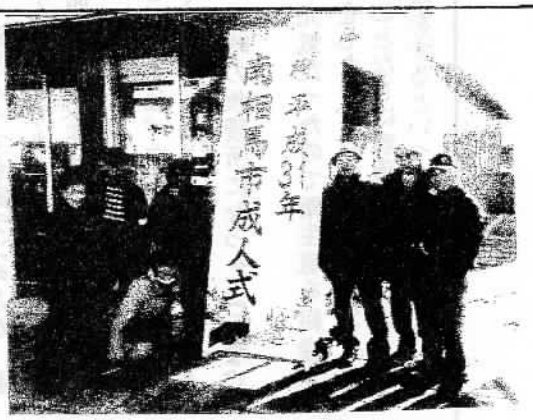
▲1月15日付『福島民報』　私たちのささやかな運動ですが、新聞掲載は嬉しいものです。

510名の新成人に幸多かれ

＜成人式報告＞　事務局長　早坂吉彦

◇はらまち九条の会では、年頭の恒例行事として新成人の皆さん一人ひとりに『憲法小冊子』をお祝いとして差し上げて、10年（回）程になります。

◇実はここ2年、南相馬市が市発行の『憲法小冊子』を成人式に配布していたので、会では重複をさけ「ピースナインコーヒー」とお祝い文を小袋に入れて、新成人の皆さんに手渡してまいりました。



▲1月13日、『憲法』小冊子の配布を終えて、お手伝いの会員と事務局員。

◇昨年暮れ、市の担当者に問い合わせたところ、『憲法』の残部が少なく今年の式では配布することはできないので中止するとの回答でした。そこで会の事務局会議で話し合い、以前に会で復刻発行の『憲法小冊子』（えんじ色表紙）を増刷して、従来のように対応しようということになり、1月13日の成人式には3年ぶりに会発行の『憲法小冊子』を手渡すことができました。南相馬市の新成人は510名ですが、式参加者は市発表で354名。そのうち手渡しできたのは310名。キラキラ輝く若者の顔を見て手渡すのも気持ちのいいものです。

市当局による『憲法・小冊子』配布を 改めて要望したい

◇手渡し終了後、お手伝いの会員さんと事務局関係者で、市民会館の休憩コーナーで反省会を兼ね拡大事務局会を行いました。私どもはらまち九条の会の陳情により市議会での「趣旨採択」を踏まえ、前市長の判断により南相馬市内全戸に配布された市発行の『憲法小冊子』（青色表紙）は、全国紙やテレビにも取り上げられ話題になりました。その後市の判断により、残部を新成人にも2年間配布してきたのです。会として市当局に対して改めて、新成人に市発行の『憲法小冊子』を再び配布するように要望しようという意見もあり、今後検討して行くことになりました。

◇皆さんのご協力に感謝し、今年も無事配布を終了したことに安堵しています。

○南相馬市当局が『憲法』冊子を発行し、全戸に配布、さらに新成人に配布したことは、全国でも稀なことです。「さすが憲法学者鈴木安蔵の故郷」と高く評価され、賞賛されました。

○『私の戦争体験』第39回は、栗村和夫さんの長崎での被爆体験です。栗村さんは2007年7月に死去されましたが、次男栗村文夫さん（会員）の許可をいただき掲載します。

私の戦争体験 39

手を握ったまま亡くなった校友のこと

南相馬市原町区　故栗村和夫さん

長崎神学校の生徒で動員中に被爆しました

私は福島市出身、昭和二年生まれです。長崎で原爆を体験した時は、十八歳で長崎神学校という専門学校の生徒でした。

その神学校は二年制で、全校生が百名程度だったと思います。徴用逃れのために入学していたのです。生徒は長崎付近の出身者が多く、福島からは私ひとり、宮城県からもひとりぐらいだったと思います。

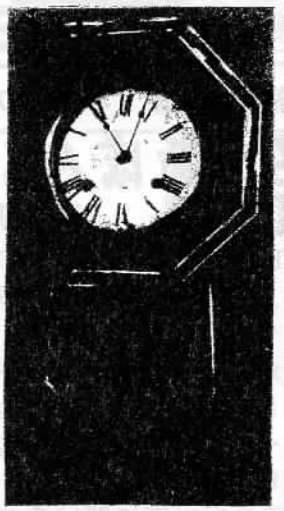
八月九日午前十一時二分肩にガラスが刺さるけがを

戦争も激しくなって、私たちも動員で長崎市内のあちこちの工場に分散して働いていました。その日も、私は南山手町という爆心地から南へ、四、五キロメートル離れた工場で働いていました。だから工場の中にいる午前十一時二分、原爆が投下されたわけです。

ものすごい音がして、爆弾がすぐ近くに落ちたような気がしました。屋根瓦が落ちてきたり、ガラスが破れて、私の肩に刺さりました。このとおり肩に三、四センチの傷が今でも残っています。私の被害はそれだけで、別に熱線とか放射能の影響は全く受けていません。

きのこ雲で町も暗くなる

その後、きのこ雲が空いっぱいに広がってきて、町も暗くなったことを覚えていますし、工場内の後片付けなんかをしました。



◀長崎の原爆炸裂時刻、11時2分を指したままの被爆の柱時計。

校友たちは火傷して悲惨でした

数時間後に、あちこちに分散していた校友たち、三菱工場で作業をしていた校友たちですが、悲惨な格好で学校に戻ってきました。ひどいやけどを顔にしていて、皮がぶらさがっていて、その皮をハサミで切って薬を塗ってやったり。薬といっても赤チンキとか、亜鉛化軟膏なんかのありあわせの薬で、それも少なくて、四、五人でなくなったみたいです。

顔なんかひどいやけどをすると、すごくふくれるものですね。皮がむけたのがピンクというか、赤くただれてひどいもんです。学校の寮が臨時の救護所になったようなぐあいです。

私たちは元気だったので衛生班を組織して、やけどをしたり、けがをした校友たちのだれということなしに看護をしたわけです。看護や手当をするといっても、薬もないし、食糧もありません。担架で運ぶ途中で死んだ人もいました。長崎の近くの出身の負傷者は、やがて家族や親が迎えに来て引き取られていき、だんだん少なくなっていきました。

亡くなった校友の冷たい手

ある校友は、私が手をにぎっているうちに亡くなりました。冷たい手でしたね。最後に「お世話になりました」と私に言ってなくなりました。父親がかけつけてきましたが、今でも忘れられないことです。負傷した校友の手当をしたりしても、別に気味わるいとか、くさいとか、そんなことを考える余地なんかありませんでした。夢中だったんですね。

爆心地には黒焦げの死体が

爆心地付近へは一週間後ぐらいに行きました。一面の焼け野原で、どこを歩いてよいのか道もわからないで、私は便所のために落ちたりして。黒焦げの死体もころがっていたようです。なんていっても、ひどい臭いがしていました。腐ったような、人の焼けたような、なんとも表現できないひどい臭いでした。長崎には、翌年の昭和二十一年三月までいました。

戦争そのものが罪悪です

戦争そのものが罪悪です。軍国主義の時代はもう二度と来ないでもらいたい。反核運動、市民運動で戦争のない社会ができれば理想ですね。市の文化センターで上映された『人間をかえせ』も女房と見に行きました。五月の時で大混雑していた時です。がんばってください。（一九八二、一〇、三一談。原水爆を考える原町市民の会発行『相双地域在住者の被爆体験集 私も証言する』より）

■ 1983年の相双地域在住の広島長崎の被爆者は２０名。その後2011年3月の大震災後にご生存の方は５名。うち現在確認できるお元気な方は、南相馬市原町区のＮさんお一人になりました。（調査・事務局）